

幼稚園百三十年記念企画 アーカイブズ『幼児の教育』(1)

明治三十四年(一九〇一年)に創刊された本誌『幼児の教育』(創刊より大正七年まで『婦人と子ども』、大正十二年まで『幼児教育』、以後現在の名称)は、現在第一〇五巻目となり、百年以上の歴史をきざんできた。

今年、日本の幼稚園の歴史が東京女子師範学校附属幼稚園創設以来百三十年を迎えるにあたり、本誌の昔年の記事を振り返り、現在の私たちの立ち場所を確認する作業の一助にしたいと思う。まず初回の今号では、昭和三年の『幼児の教育』に掲載された、同幼稚園における、ちようど五月の保育記録を紹介する。

朝の一時間

むらねき

八時二十分頃幼稚園の入口にくとと治さんと震一
さんとが私の来るのをまつてゐた。急いで二人を附
た。窓ぎわの植木臺の棕櫚竹とスウヰトアリサム籬
ぎくなどの鉢うゑに水をやる。

添からひきとつて川の組のお部屋へゆくと實習科の
水槽の金魚や硝子鉢のかたつむり四匹も異状がな
方たちが八時の授業の前にきれいに掃除をしてあつ
い。幼児と一緒にお花の水をとりかへに廊下へ出る

と早くからきてゐたのか博久さん恵美子さん卓治さんが遊戯室の方からとび出して来て「先生お早う」と後からついてくる

五人の幼児と長椅子に腰をかけた私は

「皆さんは毎日早くから幼稚園にいらつしやるのね、一度も先生が一等になつた事がない」

といふと幼児はいづれも大得意（この人たちは女學校や小學校のお姉さんと一緒にくるので普通の登園時間よりは一時間も早い）

「皆さんは幼稚園で何がすき」

「遊戯」

と一人が云ふ又一人又一人又一人遊戯の讚美者

博久さん曰く

僕お話も大すき（この人はとくにお話がすきの様で入園當時お話の時だけは附添をはなれた）あゝきふのお話随分面白かつた（自分は至つてお話がへたであるが昨日は大きな謎の話で猿や猫や犬鼠にはと

りがつきつきとまりの中にくろげこんで大きなまりはキャンニャアワンチユーコケツコーとところころがる内容形式ともに面白いお話であつたから）

「あゝあの大きなまりのお話ですか先生もあのお話は大すき」

恵美子さん

「あたしも面白かつたわ、おうちへ歸つてお母様にしてあげた、おしまひは忘れちやつて云へなかつた」

治さん

「おさむちやんもお家で話した」

「あゝそう、されから何がすき」

「お辨當も大すき」と震一さんがいふ。

しづかに入り口の戸をあけて益彦さんが入つてきた「益彦さん今日は電車ですか」

ときくと白い小さい歯を出して笑ひながらうなづいた。そばにゐた人たちが

「僕も電車」「僕も省線」

と口々に云ふ

これで七人になつた。

「ゆうべは随分雨がひどく降りましたね」

と話しかけると震一さん曰く

「僕は地震があるかとおそくまでおきてたからあらしをしつてゐる、きのふの地震で僕つぶれるかと思つてにげ出さうと思つた」

ほかの人たちはあらしをしらない様子。

よし子さんが入つてきた。

私のそばに話をしてゐた男の子三人はいつの間にか長椅子のそばへ自分の椅子をもつてきて、電車遊びをはじめた。

義朗さんがよちよちの足どりで入つてきた。

おさむさんは急に思ひ出した様に上衣をあげて

「先生ばんどをしめてきたの、きのふお母様がお姉さまと一緒に三越からかつてきてくださった、夕方

かへつてきたの」

「まあきれいですこと」

おさむさんは随分うれしそうにバンドをいぢつてゐた。繁哉さん克彌さんがきた。二人はすぐにお部屋の中の砂場で遊び出した。

静子さん取子さんがくる。

幼稚園のばあやが幼稚園協會の書留をもつてきた私ははがま口から印を出して受領認におしてゐるとそばの一人は

「僕もお金をもつてゐる」

と云ひ出した。

女の子四人でおにごつこを始めた。

美那子さんと和子さんのぶ子さんゑい子さんが連れ立つてはいつてきた。

旅客用飛行機がはじまつた。博久さんは運轉手になつてつきつきくる人をお客にしてゐる。

一雄さん好禮さんもきた。



おにごっこをしてみた女の子のかたまりは人数がふえたのでいつのまにかかごめを始めた。

眞土夫さん兼三郎さん庄次郎さんもきた。

お部屋の中は砂場あそび電車飛行機遊びにかごめ遊びと面白そう。

入園開始の今から一ヶ月半ばかりの前を思ひ出し

*

*

*

年少クラスの五月二十八日、規定の登園時間（九

時か）より早く登園した子どもたちと、保育者とののかなやりとりの様子である。三々五々やつてくる子どもたちの一人ひとり、生活感のある日常の所作をいとなみながら温かくうけとめる保育者の姿。窓際のシユロチク、スイートアリサム、ヒナギクの植木鉢に水をやり、金魚やかたつむりに「異状がない」ことを確かめ、「幼稚園のばあや」がもつ

て幼児お互がこんなによく遊べる様になつた事をつくづくうれしくながめた。

時計を見ると丁度九時二十分

本校の園藝の先生からいたゞいておいた花壇の金盞花と三色すみれを摘みに、皆をつれて出かけた。

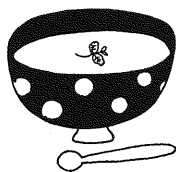
（五、二八）

てきた書留にはんこを押している。

一時間も早く登園してきて、「一度も先生が一等になつた事がない」と得意げに語る子ども。附属の女学校や小学校のお姉さん、あるいは付添いの者と登園してくる者（付添い人待合室というものが附属幼稚園に当時あつた）がおり、三越デパートで「買ってきていただいた」バンドをうれしそうにいじっている子どもなどは、平成の現代ではちよつと

お目にかかれそうもない（室内に砂場があるのも）。当時幼稚園数は千三百、就園児数十万人余という時代、とくに附属幼稚園の子弟は上流家庭の子どもに限られていた。しかし、先生との会話の生き生きさ、いつの間にはじまる電車遊び、おにごっこ、飛行機あそびなどは現代の普通の幼稚園に通じている。それでも、どこか悠長でいいいな言葉遣い、女の子たちの「かごめ」には懐かしさを覚える。

幼稚園令が布告されて二年、「観察」が保育項目に加わり、型どおりの恩物教育は後退し、子どもも自発的な遊びを取り入れようとははじめている時期である。同園における「五月」の保育計画が、右の記録の掲載された二か月前の「幼児の教育」（二八巻四号）に紹介されている（下部
たみ）。五月の主材は「五月の節句」、「遠足及戸外遊び」、「五月の誕生会」、「五月の庭園及其他」と



なっており、「附」として「お弁当の楽しみ」がある。入園後「漸次希望のものから」お弁当をもってくることになっており、この五月から「殆ど全部揃って」もってくるようになる、とのこと。「漸次」や「殆ど」などのあいまいさがおもしろい。遠足の行先は「陸軍戸山学校」、その他「伝通院」「聾啞学校」への園外保育が計画されている。

きつちりと定められた月案の熟慮性、まじめさが認められる一方で、「朝の一時間」という中途半端な保育時間を記録にしたための態度がある。子ども
の普段の姿を大切にうけとめる保育観の成熟と、保育者の余裕のようなものを感じる。

（編集部）

☆引用部分は現代仮名遣いに改めた。